童話の部 大賞

第38回 日産 童話と絵本のグランプリ

木箱の蝶

藪口 莉那

お父さんの部屋から、ハタリと音がした。

柔らかい葉っぱが風にひるがえる時にたてるような、ほんのかすかな音だった。ぼくは、そっと部屋をのぞいた。だれもいない部屋を、夕日がオレンジに染めている。水槽で、金魚のイチ子がポクリとひとつ泡をはいた。

気のせいかな。

ドアを閉めかけた時、また音が聞こえた。本棚のあたりだ。そっと本棚に近付いて、ずらりと並ぶ本の上や隙間をのぞきこむ。すると、上から三段目の右端に、ぽつりとひとつ箱が置かれていることに気が付いた。大きさは、手のひらくらい。真四角な、こげ茶色の木箱だ。持ち上げると、積み木のように軽かった。ふたに手をかけたとき、後ろから声がした。

「どうしたんだい？」

振り返ると、お父さんが立っていた。

「お父さん、この箱はなあに？」

ぼくがそうたずねると、お父さんはほほえんで、そっと木箱をぼくの手から取りあげた。

「この中にはね、とても美しいものが入っているんだ」

見たいかい？　とたずねられて、ぼくはうなずいた。お父さんの大きな手が、ゆっくりと木箱を開けた。

木箱の中には、一枚の蝶の羽が横たわっていた。カラス貝のようになめらかな三角形の羽だ。色は、夕焼けに似たオレンジ色で、その上に、黒色の曲線がいく筋も交差し、柔らかな模様を作っている。

「きれいだろう。ウスイロヒョウモンモドキという蝶の羽さ。随分前に、山で拾ってね」

「ウスイロヒョウモンモドキ？」

「この羽を持つ蝶の名だよ。子供のころ、お父さんはこの蝶が好きだったんだ」

お父さんは、窓の外を指差した。オレンジ色に染まる町の向こうには、やはり夕日を受けて輝く深緑色の山がいくつも連なっている。

「あの山の上の高原に、昔はよく飛んでいたよ。風になびく草の上を、このオレンジ色の羽で、ひらり、ひらりと舞い落ちる花びらのように飛ぶんだよ」

「お父さん、ぼくもその蝶を見てみたいよ」

ぼくがそう言うと、お父さんは悲しそうに首を振った。

「この蝶はね、今ではずいぶん数が減ってしまったんだ。だからもう、滅多に見られないんだよ。さびしいことにね」

その夜、ぼくは夢をみた。お父さんの部屋を飛ぶ、ウスイロヒョウモンモドキの夢だ。

夜闇の中、夕焼け色の蝶が一匹、するりと木箱をすり抜けて飛び立った。蝶は、風に揺れるろうそくの炎のようにゆらゆらと羽ばたいて、お父さんの部屋をゆっくりと一周した。蝶が羽ばたくたびに、ぼくにしか聞こえないかすかな羽音が、夜の底に積もっていった。

蝶は、水槽のふちにとまり、イチ子とじっと見つめあった。蝶が羽を動かすと、イチ子も返事をするように、ポクリと小さな泡をはいた。

ハタリ、ハタリ、ポクリ

ポクリ、ポクリ

二匹にしか分からない沈黙の会話が、しばらく続いた。そして、イチ子の小さな尾ひれが水草を柔らかくなでた時、蝶はまたはらりと飛んだ。部屋を漂って、小窓のふちに舞い降りる。

小窓の外には、真っ暗な夜が広がっている。町には、ぽつぽつと灯る街灯の他に、明かりはない。動くものはなく、すべてが静かに眠っている。道標のようにまっすぐ続く白い街灯の光の列をたどった先には、より深い夜をまとって黒い一塊となった山々がたたずんでいる。そして、それらすべてに覆いかぶさる夜空には、ちらちらと瞬く星々と、美しい弧を描く月が静かに輝いている。

蝶は、長い時間、小窓から夜をじっと見つめていた。そして、うっすらと空が白むころ、ひっそり木箱へ戻っていった。

次の日、朝ごはんを食べた後、ぼくは画用紙と絵の具を机の上に広げた。そして、画用紙をたくさんの小さな蝶の形に切り抜いた。何十匹もの真っ白な画用紙の蝶が、はさみの先からこぼれ落ちて山になった。本物の蝶のように、画用紙で作った触角や足も、のりできちんとはりつけた。絵の具を手に取った時、お父さんがやってきた。

「何をしているんだい？」

「ウスイロヒョウモンモドキを作っているんだ。あの羽の蝶の仲間たちだよ」

「どうして、仲間を作るんだい？」

ぼくは、夢で見た蝶を思いうかべた。小窓から外を見つめる蝶は、美しく、ひっそりと静かで、それから少しさび

しそうだった。
「ひとりきりで、さびしいと思うんだ。だから、ぼくが仲間を作るんだよ」
お父さんは、驚いたようにぼくを見た。それから、にっこりとほほえんで、ぼくのとなりに腰をおろした。
「そういうことなら、お父さんも手伝おう」
ぼくたちは、パレットの上で絵の具を混ぜあわせた。いくつもの絵の具を少しずつ足していく。ふたりで何度もやり直し、随分時間をかけて、ようやくあの美しいオレンジ色に似た色ができあがった。真っ白な蝶の羽に、ぼくが太い絵筆でオレンジ色をぬり付けて、お父さんが細い絵筆でていねいに黒色の模様を描いた。
「お父さんはね」
絵筆を動かしながら、お父さんは僕に話しかけた。
「あの羽を大切にしていたんだ。もうあの蝶には二度と出会えないかもしれないと思うとさびしくて、あの羽は、安全な箱の中に入れたまま、ずっと残しておくつもりだった」
だけど、とお父さんは顔を上げて、優しい目で僕を見た。
「お前は、あの蝶のさびしさに気が付いたんだね。そして、蝶のために仲間を作ろうとしている。お父さんには、思いつかなかったことだ。とても素敵な考えだよ」
お父さんは絵筆を置いて、大きな手でぼくの髪をくしゃりとなでた。
全ての蝶に色をぬり終わったのは、夕方のことだった。絵の具が乾くと、ぼくとお父さんは、画用紙の蝶たちを両手に抱えて、お父さんの部屋に向かった。
お父さんの部屋は、昨日と同じように夕日に染まっていた。机の上に画用紙の蝶たちを並べ終えると、ぼくは木箱のふたをそっと開けた。
一匹のウスイロヒョウモンモドキが、羽を広げて木箱からすべり出た。ウスイロヒョウモンモドキは、そのまま机の上へはらりと降りて、語りかけるように触角を震わせた。
すると、画用紙の蝶たちが、一斉に、ゆうらりと羽を動かした。羽に続いて、探るように触角が動き、それから足がさらりと机をなでた。
蝶たちは、一層大きく羽を動かして、一匹、また一匹と机から飛び立った。そして、たちまち空中で集まって、オレンジ色の一群となり、ふくらんだり縮んだりしながら、部屋中を漂った。木箱の蝶がどれなのか、ぼくにはもう分からない。
お父さんが窓を開けた。ひゅう、と夕暮れ時の透き通った風が一筋吹き込んで、蝶の群れは、はらはらとほどけた。それから、一本のリボンのように一列に連なって、窓の外へ飛んでいく。
一匹の蝶が、ぼくの指にとまった。ぼくは、その蝶が木箱のウスイロヒョウモンモドキだと気が付いた。黒い目が、じっとぼくを見た。
「仲間たちと、元気でね」
ぼくがそう言うと、蝶は、ハタリと大きく羽ばたいた。そして、蝶のリボンの最後について、窓からするりと出て行った。
夕焼け色の空の下、蝶たちは小さなもうひとつの夕日のように丸いオレンジ色の群れになり、山へ向かって、飛んでいく。
お父さんと僕は、窓辺に並んで、遠ざかるその姿を見送りながら、いつまでも手を振り続けた。
木箱は、もう空っぽだ。イチ子がポクリとはいた泡が、ぱちんと水面ではじけて消えた。

藪口 莉那
35才　会社員　静岡県

受賞のことば

この度は素晴らしい賞に選んでいただき感謝いたします。2年前の優秀賞は方角も分からずに夜の海を漂う中で見付けた灯台の明かりのようでした。その明かりを頼りに進み、今やっと陸を見た心境です。書きたい物語はまだ沢山あります。この受賞を糧に新しい物語を創り続けます。

受賞歴　第36回 日産 童話と絵本のグランプリ 優秀賞
第37回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

審査員コメント

読み終えた時、物語の世界を照らしていた夕日のぬくもりが胸に残っているような幸せな気分になりました。描かれた場面の一つひとつが映像を見るように鮮やかなのは、確かで豊かな文章力の成せる業でしょう。ハタリ、ポクリ、などのオノマトペも効いています。選考会では、美しく上質な文体ながら読者である子どもに届きづらい表現がある点が指摘されました。確かに“道標”“一塊”などの漢字づかいや“沈黙の会話”などひと工夫ほしい表現もあります。あとひといき。がんばってください。

富安 陽子